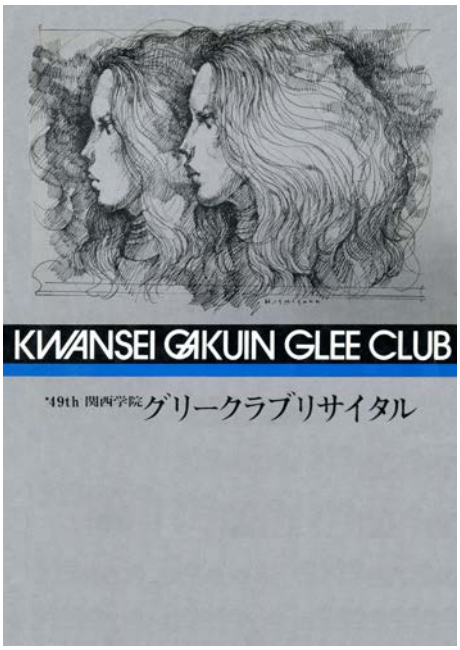
49th RECITAL 【1981 年（昭和 56 年）1 月 18/24/25 日】

日本青年館神戸文化ホール/フェスティバル



V

男声合唱組曲

「雨」

雨の来る前
武蔵野の雨
雨の日の遊動円木
十一月にふる雨
雨の日に見る
雨

作曲
多田武彦
指揮
北村協一

第49回リサイタルおめでとうございます。

昭和20年代というと、お正月といってもまだそんなに浮き浮きもしていられない時代でした。まして小正月が終ってしまうと、あとはまだ瓦礫の残る街に木枯しの吹くばかり。

そんな頃、まだ暖房もない客席を包みこむように、関西学院グリークラブの暖かいハーモニーが流れて来ました。こんな想いを毎年毎年想い出しながら、一月の関学グリーのリサイタルを私は迎えます。

今後も多くの関学グリーファンの為に、すばらしい活動を続けて下さい。

今宵の演奏会のご成功と今後のご発展を心からお祈りいたします。

多田武彦

作曲家

男声合唱組曲「雨」

男声合唱組曲「雨」について　　多田武彦

雨は、人間にとっては、随分と親しい間柄である。そのうっとうしい自然現象は、昔から人間にいろいろな孤独感や悲哀感を与えてきた。同時に、雨があがるときの、あの清らかな、すがすがしい気分をも、しみじみと人間の心に伝えてくれてきた。

そういうさまざまな雨と、そのときどきの人間の心との交流を主題にして、私はこの作品を、心をこめて書いてみた。

第１曲の「雨の来る前」は、昭和35年度全日本合唱コンクール課題曲入賞作品であるがかねてから、これに数曲を続けて、組曲にしたいと考えていた。

そこで、まず第１曲と第２曲「武蔵野の雨」によって、自然現象としての、力強い、うっとうしい、わびしい雨をとらえた私は、第３曲「雨の日の遊動円木」では、人のいない雨の日の、児童公園の冷たい風情のなかに、人間の孤独感をにじませ、第４曲「十一月にふる雨」では、突き刺すようなモチーフのたんたんとした繰り返しによって悲哀感を盛りあげてみた。

そして、第５曲「雨の日に見る」では、冬の雨の日の、あのもやのかかったような冷気を通して、孤独感や悲哀感に打ちひしがれた主人公が、庭に見事にみのったザボンの実―（ある人にとっては、それは到底実現しそうにもない輝かしい理想であり、ある人にとっては、それは手のとどかないところにいる恋人でもあるが）――と離れてじっとすわっている姿を浮彫にし、第６曲「雨」では、こうした悩みや苦しみから昇華し切った主人公があふれ出ようとする涙をおさえて、しみじみと歌いおえる曲想とした。

この組曲ができたとき、私は「今後いつでも作曲の筆を折っていい」と思ったし、とりわけ第６曲「雨」は、私の臨終における鎮魂曲として、私の心の奥深く刻みこまれてしまった。

尚、この組曲は、明治大学グリークラブからの委嘱作品として昭和42年２月に作曲、同年５月、外山浩爾氏指揮により初演された。